

63 看護学生の臨地実習に携わる病棟看護師のとまどい

—フォーカスグループインタビューによる病棟看護師の語りから—

病院看護部 藤枝徳子 古田佳奈代 澤田理紗

<はじめに>臨地実習において指導にあたる看護師の役割は重要である。先行研究では、実習指導者が認識している指導上の困難について明らかにされている。実習指導者でさえ臨地実習に対する困難を抱えていることから、病棟看護師はより困難や不安、迷いを感じ実習指導への負担が生じていると考えられた。そこで病棟看護師が実習指導を行う上において指導の手段や方法が思いつかずにまごつくこと、どのようにしたら良いか分からない状態をとまどいとして定義し、明らかにすることを本研究の目的とした。

<研究対象と研究方法>対象は本院において、臨地実習指導者講習会を受講していない病棟看護師とした。実習指導に携わってどのような事にとまどいを感じたかについてフォーカスグループインタビューを行った。逐語録を要約し3名の研究者間でデータの解釈を行い、解釈したデータは研究参加者に表現の相違を確認し修正後、解釈したデータをコード化、カテゴリー化した。

<結果> 研究参加者は10名で平均年齢は44.8歳、平均経験年数は18.6年であった。データは14のサブカテゴリー（【】と示す）と5つのカテゴリー（『』と示す）が抽出された。

病棟看護師は、『学生の情報や理解の程度がわからない』『指導の経過について適切な申し送りの方法がない』ことから、【情報共有の困難】を感じていた。また、【指導体制の不備】については『日々指導に携わる看護師が異なり継続した指導ができない』『病棟看護師の役割が明確でない』ことがあげられた。自己の指導に対して、『指導する自信がない』『指導にかかる時間を上手く確保することができない』『的確な助言ができない』『学生が気付きを得られるような言葉の選択や注意の方法を迷う』と、【指導力の不足感】を感じていた。自分が学生時代に受けた指導と現在の指導を比較し、『厳しさも必要だがそれができない葛藤がある』『自分が受けた指導と現代の指導のあり方に変化を感じる』ことから、【過去に受けた指導との相違】を感じていた。学生に関しては、『態度が適切でないことに気づかない学生がいる』『指導してもやり方を修正しない学生がいる』『想定外の言動をする若い学生がいる』『学生の社会経験が実習に影響を及ぼすことがある』と【学生の言動に対する困惑】をあげていた。

<考察> 【情報共有の困難】【指導体制の不備】に対しては申し送り方法の検討や指導体制の整備が必要である。【指導力の不足感】の背景には学生への願いや思いがあり、自己の言動が学生に及ぼす影響を重要視している。病棟看護師が実習指導に関わる意義や、学生とどのように関わってほしいかを伝える働きかけが必要と考える。【過去に受けた指導との相違】に対しては、叱るよりほめて伸ばすことが重要と考える。ほめることは、相手の自信ややる気を生み出す効果があると同時に、相手の言動を観察し理解する必要が生じ、自己の成長にも繋がると考える。【学生の言動に対する困惑】に対しては看護師が捉えている認識と学生が捉えている認識は異なる場合があることを理解することでとまどいを軽減できると考える。